

コミュニティ・スクール委員会だより

発行者：にしみたか学園コミュニティ・スクール委員会 会長 佐藤 友厚

生徒会+評価部

CS委員会評価部 中山裕之
夏休みを目前に控えた7月8日に二中学生会と評価部のメンバーで懇談会を行いました。

評価部で作成した原案をしっかりと読み込んで、懇談会に臨んでくれた様です。さすが生徒会のメンバー！

懇談会では、大人の視点と子ども視点のズレを聞いた事は大きな成果。やはり直接対話は大事です。

例えば、案の中にあつた、「他人の失敗を責めない」に対し、「明らかに自分が失敗した時でも大丈夫だよって言ってくれる。たまには放っておいてほしい時もある。」

「失敗の理由をちゃんと伝えてあげた方が失敗した人のためになる」「でもすぐはダメ。アドバイスをするタイミングも考えない」と……

子どもたちもいろいろ考えているんだなと感心しました。

後日、生徒会でまとめたものが提出されましたが、しっかりと議論してくれた事が伝わります。「子どもの本気に大人も本気で応えよう！」と強く思いました。

生徒会の皆さん、担当の先生方、お忙しい中のご協力ありがとうございました。

保護者代表PTA

二中PTA会長 菊田誠
「子どもが決めた目標に対して、保護者はどのように応援やサポートをしますか？」
皆さんは、誰かこの事について議論を交わしたことはありますか？

今回、にしみたか学園三校のPTA役員が第二中学校に集まり「保護者ができること」というテーマで熟議を行いました。

グループを4つに分け、「育てたい児童生徒像」各々に対してアクションプランを練り、その後全員でまとめの議論を行いました。三者三様の意見が飛び交う白熱した熟議となりました。熟議を通じて感じたことは、人と議論を交わすことで新たな「気づき」があるということです。

そういった視点があるのか！その考え方がいいね！と様々な意見を組み入れることで、伝わりやすいアクションプランになったと思います。

教員+CS委員

二中 海野江利子先生
CS委員会や生徒会で以前より話し合われた経緯を考えると、具体的な取り組みを考えたいと思いを臨みました。グループ熟議が30分と短い中で、取り組みたい内容の大枠を検討しました。「生徒が安心して自分を表現できる雰囲気づくり」等、自身で言語化することが難しかった考えを実感でき、またCS委員や学園の小学校の先生の立場からの考え方も知ることができ、大変意義のある会だと実感しました。小学校や地域の方々と協働して教育にあたっていききたいと強く思う熟議でした。今後とも学園に携わる一人ひとりが学校生活で生活面・学習面からどのように接していくべきかをより具体的に考え、話し合える機会を得られれば嬉しく思います。



アクションプランに向けた

見聞き特集① 熟議！

「自ら考え、行動し、自ら未来を切り拓いていく児童・生徒」
「失敗を恐れず、積極的にチャレンジしていく児童・生徒」

にしみたか学園の目指す児童・生徒像の実現に向けて、それぞれの立場から行動を計画するアクションプランの作成が2年目を迎えました。昨年度の子ども熟議、地域熟議、三校PTA連絡会、CS委員会の熟議で出た多くの意見を基に、今年度はアクションプランをまとめ、それぞれの立場から、さらに具体的なアクションを検討して仕上げていきます。

自分はどうな事ができるかな？
どんな取り組みが必要かな？

にしみたか学園のアクションプランは、子ども達が自ら考えた【子どもが取り組むこと】を起点として、【家庭（保護者）ができること】【学校が取り組むこと】【地域ができること】へとプランが連鎖していきます。

子どもが本気でやることに、大人も本気で応えよう！と、7月8日に生徒会とCS委員の懇談会、7月17日に三校PTA熱議、8月26日に教員とCS委員によるリモート合同熟議が行われ、さまざまな視点から熱く深い思いが語られました。その様子や、感想、報告をいたしております。どうぞご覧ください。

教員+CS委員

二小 上田仁哉先生
8月26日（木）に小中学校合同熟議が開催されました。にしみたか学園の教職員が子ども達が考えたアクションプランに対して、教職員ができることは何かを話し合いました。

今年度はコロナ感染症予防対策のため二小・二小・井口小の教職員がオンラインにより協議を行いました。協議の中では、「子どもの目標設定の仕方」（子どもが目標を立て、自分の意見を発表する活動を教科問わず授業に取り入れていくこと）や「できた、分かった」という達成感を感じるような経験をさせる（「学びの喜び、楽しさが伝わる授業を行う。教科を超えて考えさせる」等、たくさん意見が出され、話し合われました。

今回、出された意見を三校で集約し今後のにしみたか学園の児童・生徒の教育活動の中で実践していきたいと考えております。



教員+CS委員

井口小 長谷川佳子先生
このコロナ禍の一年半、教員同士、児童・生徒間の交流がなかなかできずにいる中で、昨年度は実施がなかなかだった合同熟議がオンラインで三校、CS委員の方々とながり、顔を見て声を聞きながら話し合いをすることができたのは、大きな意味があったと感じました。

経験年数や担当する教科、目の前にいる児童・生徒の姿が違えば、アプローチの切り口が異なっているものの、コアにある「めざす方向性」には相違がないのだと実感しました。9年間の児童・生徒の成長を意識しながら、私たち学校の役割を再確認する有意義な時間となりました。実際話してみると、もっとじっくり深めた気持ちになりました。



にしみたか学園ホームページ

本紙はコミュニティ・スクール委員会コミュニケーション推進部（CS 委コミ推部）が企画編集しています。
CS 委員会にご意見・ご質問・ご相談などありましたら、メンバーまでお気軽にお寄せください。

あんなミタカこんなミタカ

vol.1 「コミュニティ・スクール」のあれやこれやを尋ねて

視点を変えれば、豊かな街の姿や学びの姿が見えてくる!? そんな想いでお届けする「あんなミタカこんなミタカ」シリーズが始まります。第1回のキーワードは、「コミュニティ・スクール」。文科省のwebサイトでは、『『地域とともにある学校づくり』を進める法律(地教行法第47条の5)に基づいた仕組みです。』とありますが、もう少し深く意味や意義をとらえていきたい! そんなわけで、CS委員会コミュニケーション推進部のメンバーが、二代目会長の矢崎喜美子さんに取材しました。

中央が矢崎さん。手前で面接を受けているようなお団子ヘアがコミュニケーション推進部・部長の亀井さんです。



これからの活動のためにも、コミュニティ・スクール(以下、CS)のそもそものところが知りたいと思って、今日はお時間を頂きました。というのも、子どもたちのために地域や学校が連携するという、理念のところはみなさん共感があるように思っていますが、それ以上に踏み込んだところがなかなか見えづらいところもあり、活動をしている私たち自身も時に迷うときがあります。

矢崎さん: CSの理念に皆さんが共感している実感があるということは、CSが浸透したともいえる環境になっているということだと思います。また、今、皆さんは自然に学校に出入りなさっていると思いますが、以前は、サポーターで学校に入っても、「何の御用でしょうか?」という硬い感じは否めませんでした。「学校をひらく」という言い方がされて、様々な活動がなされてきました。保護者や地域の人に対して、今のように学校がひらかれている状態というのは、やっぱりCSの取り組みの成果だと思えます。

確かに、参加していると当たり前になっちゃうのですが、地域というものがいろんな手によって維持されているということが実感されて、日々勉強になります。ところで、CSって、学校側の指針を承認することも求められていますよね。なんだか、承認って気がひけるんですが。。。

矢崎さん: 学校が開かれ、参加しやすくなってきたら次のステップは、参画と協働です。学校の方針を承認するというのは、目的を共有し、一緒になって子どもを育てていこう、という専門家ではない私たちの協働の意思表示です。わからないことや疑問に思うところはよくよく意見交換しあって共通認識を持ち、逆に私たちの要望も具体的に提案していくことが大事です。承認して終わりではなく、学校づくりに参画協働していくということがとても大切です。その意味では、承認をした後が肝心ですよ。コミュニティ・スクールという形は、そこにあるものではなく、つながりあう人たちの手によって出来上がっていくものなんです。当初は、いきなりふって湧いたようなところがありました。それが、なんとか形になってきているのは、それ以前より続いていた地域の活動だったり、地域と先生との交流があったか

らだと思えます。CS委員会の会議はコミュニケーションを高めるためにも大切です。何よりもみんなと一緒に考えている時間にしていくことが重要ですよ。裏話をすれば、承認を得るために必要な資料をつくるのは、学校側では結構大変なんです。

承認って奥が深い。。。確かに、先生や地域の方々といろいろとお話したいです。困りごとがあれば、みんなで解決したいし、やってみたいことがあるれば、協力してどんどん実現していきたいです!

矢崎さん: いいですね。CSスタート当初は、学校との情報交換や学校の教育方針にどう協力していくか、という傾向が強かったですが、今は、やりたいうこと、やってみたいことをお互いに提案し、協議しあえる雰囲気がありますよね? だから、いろいろな挑戦できた素敵なはず。大人も子どもも、活動の源は、楽しさと達成感ですものね。

ありがとうございます! この記事を読んでくれた方にも、そんなワクワクが伝わったら嬉しいです。今後とも、どうぞよろしくお願いします!

なるほど。「学校をひらく」ということで生まれた成果はどのようなものがあったのでしょうか?

矢崎さん: たくさんあると思うんですが、保護者を含む地域の人たちが学校に関心を持って、互いに顔を見知った関係で出入りすることは、防犯面での抑止効果があるとはよく言われています。また、当時の管理職の先生方からは、クレームが減ったというお話はよく伺いました。学校の風通しがよくなることで、お互いを理解するための機会が増えたからではないでしょうか。さらに強調しておくべきポイントとして、三鷹は学園として小・中一貫カリキュラムに基づく教育が行われていて、小学校と中学校の間で先生方の情報共有も図られています。CS委員会は、小中の先生、各学校の保護者、青少年対策地区委員会や交通安全対策地区委員会、町内会、井口コミセンといった地域の諸団体関係者や、保育園や幼稚園関係者らで構成されていますから、地域ぐるみで子どもを育てていこうという仕組みが制度としても保証されています。開かれた学校は、そうした横の連携の深まりとともに創られてきているものだと思います。

*この記事は、矢崎さんへの90分に渡るインタビューをもとに、よもやま話を整理し、編集をして書き起こしたことになります。未公開部分は、コミュニケーション推進部のメンバーの胸に秘めて、これからの活動に活かしていきたいと思えます♡